

## 地方留学の利点と課題

—大分，秋田，鳥取の留学生の交流状況と意識に関する調査から—

佐藤 由利子



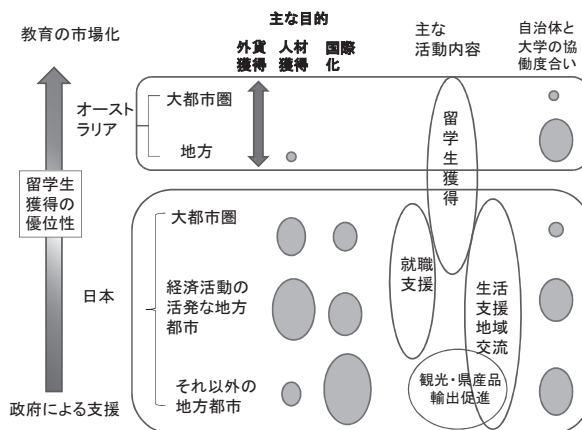
# 地方留学の利点と課題

—大分，秋田，鳥取の留学生の交流状況と意識に関する調査から—

佐藤 由利子\*

## 1. はじめに

地方は大都市圏に比べ、人口の高齢化、企業誘致や雇用確保の困難さなどの課題を抱えており、留学生獲得においても、学生が大都会に惹きつけられる、アルバイト先や就職先が少ないなど、不利な立場に置かれていることが多い。他方、物価の安さ、地域文化、豊かな自然、行政・教育機関・産業界が一体となった支援など、地方ならではのメリットも数多く存在する。留学生増加はプラスの経済的、社会的効果をもたらすことが知られており、自治体の中には、地域振興策の一環として、大学等と協働して留学生の受入れや支援に取り組む事例が見られる。例えば白土ら（2010）は、福岡県が経済活性化策の一環として留学生を積極的に受入れ、ブリッジ人材として地場産業への就職促進を図る動きを分析しており、Rofe & Macintyre（2007）は、南オーストラリア州の州都アデレードにおける留学生増加に対する住民の反応を分析している。



出典：佐藤由利子「留学生受入れによる地域活性化の取組みと課題」, ウェブマガジン「留学交流」2012年6月号

図1 留学生受入れ・支援の取組みの地域別類型化案

佐藤・橋本（2011）は、日本とオーストラリアの5つの自治体における大学等と協働した留学生受入れ・支援の取組みを横断的に比較し、英語圏の南オーストラリア州では留学生がもたらす外貨増大が主な目的であるのに対し、非英語圏で外国人口比率の低い日本では、留学生による教育・地

\*東京工業大学留学生センター准教授

域・企業の国際化へ期待が強いこと、福岡、広島など経済活動が活発な県では、地場産業の国際展開強化のための人材として留学生受入れを促進する傾向があるのに対し、大分や秋田といった、県内総生産が小さく高齢化が進む県では、留学生に教育や地域の国際化を期待する傾向が強いと分析し類型化を試みた。また佐藤（2012）は、佐藤・橋本（2011）の類型化に、大分、青森などで観光振興や県産品輸出促進に留学生が協力していることを加味し、図1に示す類型化案を示している。

秦（2001）は、大学とコミュニティ（地域社会）の共生に関する先行研究をレビューし、「日本の大学の歴史は大学とコミュニティの関係が希薄」と指摘しているが、いくつかの地域においては、留学生が、大学と地域社会の協働を促す契機となりつつある。

本稿では、図1の類型化案で「それ以外の地方」に分類される、第2次、第3次産業の規模が比較的小さく、過疎化、高齢化が進んだ県の内、国際的教育を行う私立大学誘致により留学生を増加している大分県、国際的教育を行う公立大学設立により交換留学生が増加した秋田県、国立大学を中心に留学生を受入れている鳥取県を対象として、関係者への聞き取りや留学生へのオンライン調査に基づき、留学生の交流状況と地域への意識について分析し、地方留学の利点や課題について考察する。本稿の構成としては、第2節で大分、秋田、鳥取における留学生受入れ状況と取組みを紹介し、第3節において、留学生へのオンライン調査等に基づき、3地域における留学生の地域住民との交流状況や意識及び提案を分析する。最後の第4節においては、それまでの分析結果に基づき、過疎化高齢化が進む地域における留学生受入れの意義と課題について考察する。

## 2. 大分、秋田、鳥取における留学生受入れ・支援の取組み

### (1) 3県の留学生受入れ状況と人口・経済指標

表1 大分、秋田、鳥取県の留学生受入れ状況と人口・経済指標

	大分県	秋田県	鳥取県	全 国
留学生数（2010）	4,198人	351人	202人	141,774人
2003年～2010年の 留学生数の変化	1.80倍	2.68倍	0.93倍	1.29
留学生人口比率（2010）	0.35%	0.03%	0.03%	0.11%
外国人口比率（2010）	0.74%	0.31%	0.61%	1.29%
老年人口比率（2010）	26.5%	29.5%	26.1%	22.8%
人口（2010）	120万人	109万人	59万人	1億2809万人
2005～2010年の人口増減	-1.1%	-5.2%	-3.0%	0.2%
県内総生産と全国シェア （2008）	4.47兆円 （0.89%）	3.66兆円 （0.72%）	1.99兆円 （0.39%）	505兆円

出典：日本学生支援機構（2011）及び総務省統計局（2010）に基づき筆者作成。

表1は、大分、秋田、鳥取の3県における留学生受入れ状況と人口・経済指標を示している。3県共、全都道府県の中で、県内総生産は小さく、65歳以上の老年人口比率が高い。特に秋田県は、老年人

口比率が29.5%と全国で最も高く、人口の減少率も全国で最も大きい。

2010年の留学生数は、大分県が、次項で述べる APU 誘致後の取組みにより4,198人とずば抜けて多く、留学生人口比率は0.35%と全国一位である。外国人口比率は全国平均の6割弱と小さいが、在住外国人の約半数が留学生である。秋田県では、後述する国際教養大学設立などにより、2003年から2010年までの留学生数は2.68倍と、全国で最も増加率が高いが、留学生数は351人と少なく、留学生人口比率も0.03%と、全国平均の三分の一以下にとどまっている。外国人口比率は0.31%と青森県に次いで全国で2番目に低く、外国人に占める留学生の割合は8.6%である。なお、技能実習生の占める割合は13.4%である（法務省、2010）。

国立大学を中心とする取組み（後述）を行っている鳥取県の留学生数は202人と、宮崎県、高知県に次いで全国で3番目に少なく、2003年以降7%減少している。留学生人口比率は秋田県と同じ0.03%であり、外国人口比率は秋田県より高い0.61%である。県内外国人に留学生の占める割合は5%であるのに対し、技能実習生の占める割合は19%と相対的に高い（法務省、2010）。

3県共、過疎化高齢化が進み、外国人口比率が低い地域であり、若い留学生は、これら地域の国際化、活性化の重要なリソースであることがわかる。国際教育を看板に掲げる大学の誘致や設立を行った大分県や秋田県では留学生数の増加が見られるのに対し、国立大学を中心とする取組みの鳥取県では留学生が減少しており、地方において留学生を増加する難しさを示唆している。

## (2) 大分県の取組み

大分県では、平松守彦知事（1979-1999年）が「アジア・太平洋のリーダーを育てる」という構想に基づき大学誘致を行い、2000年に立命館アジア太平洋大学（APU）が別府市に設立された。APUは、学生の50%が留学生、外国籍教員50%、50カ国以上からの留学生という3目標を掲げて開学し、日英2言語による授業と異文化交流による国際的教育を特色としている。APU 設立を契機として、別府市の留学生数は1998年の118名から2009年には3,384名へと29倍に増加し、12.7万人の市人口の留学生比率も2.7%と全国1位となった。また、大分県でも同期間に留学生数が14倍に増加した。これは、APU 設立に加え、県内の他大学でも、留学生の増加が見られたことによる。

増加する留学生を産官学が共同で支援することを目的として、2003年に大分県留学生関連施策協議会が結成され、2004年にはNPO法人「大学コンソーシアムおおいた」（以下「大学コンソ」）が設立された。県庁及び大学コンソ関係者からの聞き取りによると、この背景には、APU 誘致を始めとした国際教育政策を、知事交替後も、財政負担が小さい形で継続しようとする県の意向があり、初代事務局長は県からの出向者が務めた。会員は、県下8つの高等教育機関からなる大学会員と県、別府市、商工会議所連合会、経済同友会などの一般会員及び賛助会員によって構成され、大学及び一般会員から選ばれた理事が運営を行っている。主な活動は、留学生の生活支援（住宅賃貸の連帯保証、生活資金貸付、中古品提供等）、交流と地域活動支援（国際理解授業、市民向け外国語教室・料理教室、県下自治体への留学生の派遣等）、就職支援（企業関係者との交流会、ビジネス日本語能力テスト受験料助成等）である。大学コンソが運営する人材情報バンク「アクティブネット」には、地域の留学生の約6割と企業、個人事業主、団体、学校等が登録し、登録団体からの要望に応

える形で留学生の地域活動機会を増やし、インターンシップや就職につなげることを目指している。

大分県・別府市（2010）によるAPU誘致効果に関する調査では、APUによる経済効果を年間212億円、雇用誘発効果を1,358人と算出し、APUの学生・教職員6,862人は別府市の人口減少を緩和し、20～24歳の若者人口割合を押し上げたと分析している。県民1,167人への意識調査では、回答者の85%がAPUは別府の国際化に寄与し、77%が別府の活性化に寄与したと回答し、住民の多くがAPU設立による変化を肯定的に捉える傾向が読み取れる。APU関係者によると、世界から優秀な留学生を獲得するため、運営費の2割を使い、95%の留学生に20～100%の授業料免除を行い、他方、日本人学生からは年間約130万円の授業料（文系大学最高水準）を徴収している。留学生が国際的教育環境を支え、この環境に惹かれて学ぶ日本人学生の学費が、APUの経営を支えている。

大分県（2011）の「大分県海外戦略」は「アジアの活力を取り込む」（企業の海外展開支援、県産品の輸出拡大、観光客増大等による地場産業の活性化）と「アジアの人材を取り込む」（国際化する地場産業に必要なアジアの人材の雇用と定着促進）を2つの柱としており、留学生を強みとして活かし、特にアジアとのパイプを太くすることにより、経済の活性化を図る計画である。大分県で就職した留学生は、2003年の2名から、2010年には52名に増加している（法務省、2011）。また、県は、月2万1千円の奨学金を120人の留学生に支給している（2012年1月大分県国際政策課聞取り）。

### （3）秋田県の取組み

秋田県庁関係者によると、同県の一般旅券発行数、海外渡航者数は長く全国最下位で、交通アクセスの悪さもあり、国際化に立ち遅れた地域であった。このような状況の打開策として、1998年、寺田典城知事（1997-2009年）が、閉鎖するミネソタ州立大学秋田校跡地を買い取り、国際系県立大学設立を目的として、秋田県高等教育推進懇談会を設置する。2001年には、大学設立準備予算案が県議会で否決されるなどの紆余曲折があったが、寺田氏再選後の2002年、関連予算が県議会で承認され、2004年に公立大学法人国際教養大学（AIU）を開学した。国際教養教育を教学理念として掲げるAIUでは全学生に交換留学機会を提供しているが、この制度は、海外協定校からの交換留学生受入れが前提となっており、AIUは、年間の派遣学生数（172名）とほぼ同数の交換留学生を受入れ、最近では正規課程へ入学する留学生も漸増している（国際教養大学、2012）。県とAIU関係者によると、県は第4期（2000年～2009年度）の基本目標の1つに「グローバル化社会に対応した人材の養成」を掲げ、AIUに対し年間約10億円の支援を行ってきたが、2009年4月の知事交代を契機として経営自立化が模索され始め、授業料（国立大学法人と同額の年間53万円）が、2012年度より3割値上げされた。2011年に発表された「あきた国際化戦略」には、「国際理解の推進と多文化共生社会の構築」が4つの戦略の冒頭に掲げられ、「留学生の受入れ拡大と地域交流の展開」が戦略の4つの柱の1つとなり、2013年までに県の留学生数を450名に増やす目標が掲げられている。

AIUの留学生の多くは、日本人学生と共にキャンパスに隣接した寮で生活をしているが、キャンパスが秋田市中心街から離れているため、地元の人々と接する機会は多くない。他方、AIU（担当：企画課地域交流チーム）は地域貢献活動の一環として、県内4つの自治体（山本郡八峰町、大仙市、男鹿市、由利本荘市）と協定を結び、留学生を国際理解授業や交流の担い手として送り出している。

また、AIU 地域環境研究センターが文化庁の助成を受けて実施した「ブンカ DE ゲンキプロジェクト」では、留学生が地元雄和町の「やまはげ」や「大正寺おけき」に参加した。留学生が伝統芸能に興味を示したことは、高齢化が進み、継承が危ぶまれていた行事を、若い世代が見直すきっかけになったことが報じられている（2010年3月4日付朝日新聞秋田版）。

#### (4) 鳥取県の取組み

竹田（2012）によると、県内の4つの高等教育機関（鳥取大学、鳥取環境大学、鳥取短期大学、米子工業高等専門学校）の内、留学生を最も多く受け入れているのは鳥取大学で、年間受入れ人数は約180名（県留学生の約9割）である。鳥取大学は2005年度、文部科学省の「大学国際戦略本部強化事業」対象校に採択され、「持続性のある生存環境社会の構築に向けた砂漠化防止国際戦略」を、中国、メキシコ、エジプトなどの大学や研究所との共同研究、人的交流を通じて推進してきた。また、2008年度からはグローバル COE プログラムに「乾燥地科学拠点の世界展開」が採択され、国際連携による人材養成及び研究活動に取り組んでいる。

鳥取県（2008）の将来ビジョン「活力 あんしん 鳥取県」の6つの柱の「I ひらく」においては、①人、物、情報の「大交流新時代」を切り拓く「北東アジアゲートウェイ（玄関）構想」、⑤観光による「ようこそ、ようこそ鳥取県」の実現、⑥活気あふれる「海外との交流」などの項目がある。「V 支え合う」では、②人種・国籍・文化・言語の違いを認め合い、尊重する多文化共生が謳われている。しかし、これらの箇所に、留学生の受け入れ推進について言及されておらず、このことは、鳥取県の留学生の受入れが、県の政策的支援を受けず、大学中心に進められてきたことを示していると考えられる。なお、竹田（2012）は、鳥取県、江原道（韓国）、吉林省（中国）、モンゴル中央県（モンゴル）、沿海州（ロシア）による「北東アジア地域国際交流・協力地方政府サミット」の際、北東アジア学長会議が開催され、研究や人的交流について協議されたことを紹介している。また、2011年4月の鳥取調査では、鳥取大学国際センターにおいて日本人チューターが「留学生サポートデスク」として組織され、来日留学生の出迎えや諸手続きを支援しており、鳥取市国際交流プラザと連携したゴミ出しや自転車運転ルールの説明などを含め、留学生に対するきめ細かいサポートとオリエンテーションを行っていることが確認された。

### 3. 大分、秋田、鳥取における留学生の地域交流の状況と意識変化の推定

#### (1) オンライン調査の概要と回答者の属性、交流状況

表2の上半分は、大分、秋田、鳥取における留学生へのオンライン調査の概要と回答者の属性を示している。調査は2011年12月に AIU の日本語プログラム教員から呼び掛けたのを皮切りに、鳥取では2012年2月に鳥取大学国際センター教員から、大分では2012年9月に大学コンソから、関係する留学生に呼び掛けて実施した。大分調査は本稿執筆時点で開始より2週間しか経過しておらず、今回は中間報告となる。留学生教育・支援機関からの呼び掛けたため、これら機関に近い留学生が多く回答している点に留意が必要である。質問は日本語と英語で作成し、各言語の回答者別に集計



した。秋田ではAIU（秋田市内）、鳥取では鳥取大学（鳥取市内）の留学生のみが回答しているが、大分では別府市と大分市の4大学の留学生が回答している。秋田では交換留学生の受入れが主体であり、女性の留学生が多いため、回答者にもその傾向が反映されている。

表2の下半分は、各種交流等への留学生の参加状況を示している。地域の文化社会に関するオリエンテーション・講義については秋田の受講率が高く、鳥取が次いでいる。小中高等学校等の児童・生徒との交流やホームステイ・ホームビジットの参加率も、秋田が最も高く、大分が次ぐ。秋田県の政策の1つが「国際理解の推進と多文化共生社会の構築」であり、公立大学法人であるAIUが、

表2 オンライン調査回答者の属性と地域との交流状況

調査の実施方法	大 分		秋 田		鳥 取	
	大学コンソーシアムおおいたよりメールで協力依頼		国際教養大学日本語プログラム担当教員よりメールで協力依頼		鳥取大学国際センター教員よりメールで協力依頼	
調査時期	2012年9月～		2011年12月～2012年3月		2012年2月～	
回答者数	日本語版回答者 11名	英語版回答者 10名	日本語版回答者 3名	英語版回答者 34名	日本語版回答者 12名	英語版回答者 4名
国 籍	韓国7名, 中国4名	ガーナ2名, シンガポール他*	台湾3名	米国6名, ドイツ3名他**	韓国6名, 中国6名	韓国1名, 中国1名, 不明2名
所属大学・学校	APU2名, 日本文理大学5名, 別府大学4名	APU9名, 大分大学1名	国際教養大学	国際教養大学	鳥取大学	鳥取大学
学生身分	学部学生9名, 修士学生1名, 日本語学科1名	学部学生4名, 修士学生3名, 博士学生3名	交換留学生3名	交換留学生25名, 学部学生2名, 修士学生4名	交換留学生8名, 学部学生1名, 博士学生2名, 不明1名	修士学生1名, 博士学生2名, 不明1名
性 別	男性6名, 女性5名	男性2名, 女性5名, 不明2名	女性3名	男性6名, 女性25名, 不明3名	男性6名, 女性5名, 不明6名	不明3名
その地方の文化や社会について、オリエンテーションや講義を受ける機会があった	4 (36%)	1 (11%)	3 (100%)	26 (76%)	9 (75%)	1 (25%)
県内の小中高等学校、幼稚園等の児童・生徒との交流に参加したことがある	6 (60%)	8 (80%)	3 (100%)	30 (88%)	4 (36%)	0
県内のホームステイ/ビジットに参加したことがありますか？	7 (64%)	5 (50%)	3 (100%)	21 (62%)	2 (17%)	1 (25%)
県の企業訪問ツアー、企業関係者との交流に参加したことがある	2 (18%)	3 (30%)	—	—	—	—
県の企業インターンシップ、就職説明会などに参加したことがある	3 (30%)	0	—	—	0	0
地域の観光振興に協力したことがある	4 (40%)	2 (20%)	—	—	6 (50%)	1 (33%)
県内でアルバイトをしたことがある	10 (91%)	5 (50%)	0	11 (32%)	6 (50%)	2 (50%)
それ以外の交流	5 (50%)	8 (89%)	3 (100%)	18 (55%)	9 (75%)	3 (75%)
お祭りや行事への参加	5	6		11	4	
お祭りや行事の手伝		1				2
農業体験への参加				5	1	3
日本語教室への参加		2				
語学教室への協力	2	1				
料理教室への協力	1	2				
自国や文化の紹介	3	5				
美化奉仕活動					3	
その他	2			9	4	1

出典：2011年11月～2012年9月のオンライン調査結果に基づき筆者作成。

注1：%は有効回答中の割合を示す。

注2：「それ以外の交流」の内訳については複数回答を可とした。

注3：\* 他の内訳はアルゼンチン、ベルギー、ルーマニア、タイ、マレーシア、ベトナム、パキスタン各1名

注4：\*\* 他の内訳はカナダ、ノルウェー、モンゴル、フィリピン、タイ、英国、台湾各2名、オーストラリア、ブルガリア、フランス、モロッコ、ポーランド、シンガポール、スロベニア、スウェーデン各1名



留学生の地域交流や学校交流を通じて国際理解を推進しているためであると考えられる。

上述の通り、AIUは県内4つの自治体と協定を結び、留学生を国際理解授業や国際交流の担い手として送り出している。2009年に交流協定を結んだ大仙市の職員でAIUに出向している鈴木一徳によると、同市の小中学校等の児童・生徒との交流に参加した留学生の延べ人数は2009年度に279名、2010年度に286名に上る。2010年秋学期のAIUの留学生数は163名（国際教養大学、2012）であることから、留学生は同市の交流に平均1.8回参加した計算となり、交流の活発さが伺える。ホームステイ等の参加率が英語回答者で62%と下がるのは、回答者の一人がMany foreign students could not be matched with a Japanese family because there were not enough families in Akita willing to participate in the programsと記述している通り、ホストファミリーの確保が困難なことが要因の1つと考えられる。大分でも学校交流への参加率は日本語回答者で60%、英語回答者で80%に上る。国際理解授業のために、多様な国籍の留学生が歓迎されることが背景にあると考えられる。

鳥取の学校交流やホームステイ参加率は3県中で最も低いが、これは鳥取大学に、AIU（企画課地域交流チーム）や大分（大学コンソ）のような交流推進体制が整備されていないことが一因と考えられる。筆者の勤務校（東京）における留学生の学校交流参加率が3%、ホームステイ参加率が5%程度であり、近隣校も同水準であることを考えると、鳥取の交流参加率は低い数字ではない。

大分では企業訪問ツアーや企業関係者との交流への参加率が日本語回答者の18%、英語回答者の30%、インターンシップ、就職説明会への参加率が日本語回答者の3割に上っている。県が「アジアの人材の取り込み」を掲げ、大学コンソ等を通じて、留学生の就職支援や地元企業との交流を推進していることが、高い参加率の背景にあると考えられる。観光振興への協力は、大分と鳥取で高い。これら自治体が、留学生を活用して外国人観光客増加を目指していることがわかる。「それ以外の交流」は、いずれの地域でもお祭りや行事への参加が多い他、秋田・鳥取では農業体験が、大分では語学・料理教室、自国・文化紹介などの機会が多い。秋田で挙げられた「その他」の3件は、八峰町における学校交流とホームステイを組み合わせた活動であり、鳥取の「その他」には日本人学生と一緒にミュージカルに出演したことなどが挙げられている。

アルバイト従事率は大分の日本語回答者で9割に上り、月平均のアルバイト収入は5万円である。私費留学生が生活費の不足をアルバイトで補う傾向が窺える。別府市の留学生聞き取り調査では、観光地のため、旅館、ホテル、飲食業のアルバイトが多いが、接客マナーや日本語など、留学生側の努力が求められる割に時給が安い、という意見もあった。増やしてほしい地域交流・接触について大分で聞いたところ、日本語回答者の同率第1位は学校交流とホームステイ/ビジットであり、第3位がアルバイトであり、英語回答者の第1位は学校交流、第2位はアルバイトであった。学校交流の人気の高いこと、また、アルバイトのニーズが高いことがわかる（本項目は大分でのみ調査）。

## (2) 留学理由の比較

図2は、回答者が選択肢から3つ選んだ留学理由の回答数を、地域別（左から、大分、秋田、鳥取の順）に示している。交換留学生が多い秋田や鳥取の回答者では、「留学先が協定校だから」という回答が最も多い。「留学・生活費が安いから」は、大分で第1位、秋田で第2位である。秋田では「質

の高い日本語教育」が第3位、「美しい自然」が第4位の理由である。大分では「先輩／友人の勧め」が第2位、「日本語学校／コースの指導教員の勧め」が第3位、「美しい自然」が第4位である。鳥取では「高校／大学の指導教員の勧め」が第2位、「美しい自然」が第3位に挙げられている。大分の英語版回答者の「その他」回答では、APUの特色あるコースを挙げた者が3名いた。交換留学生にとっては協定校であることが、正規課程留学生にとっては留学・生活費の安さが、地方留学の強い動機付けになっており、質の高い教育や特色ある教育、指導教員／先輩／友人の勧め、美しい自然も、地方留学を後押ししていることがわかる。

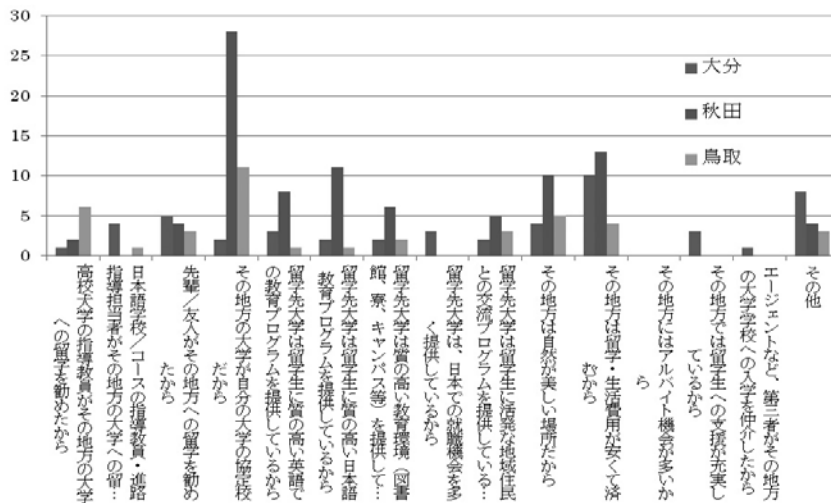


図2 その地方に留学した理由

### (3) 来日時の印象

秋田の、秋田到着時の印象をテキスト分析した結果、「(自然が)美しい」(27%)「田舎・地方・(街から)遠い」(各22%)「静か・忙しくない」(11%)などの語彙頻度が高い。また、大分の英語回答については、「平和」(30%)、「美しい」(20%)などの語彙が多い。大分の日本語と鳥取の全回答は、件数が少ないため、全文を下に示す。やはり「田舎」「きれい・美しい」「静か」「不便」「親切・やさしい」などの語彙が多く見受けられる。APU留学生への聞き取り調査では、スーパー、デパート、商店などで英語を話す人があまりいないことに驚いた、という声もあった。

#### <大分の日本語版記述回答>

大分の空気はとてもやさしい味で、人々はゆっくりでやさしい表情でしたから暖かく感じました。静かなところだと思いました。小さい、何も無い。あまりにも田舎だけど、空はすごくきれいです。すごく住みやすい感じ。ちょっと田舎みたいな印象。住みやすい町だと思った。田舎って言っても私が住んでいたところよりは発展してるな。本当に田舎なんだと思われた。自然的な美しさがきちんと守られ、地域住民と留学生が交流できる環境等に良い印象を受けました。

<鳥取の日本語版及び英語版記述回答>

思ったよりは田舎ではない。他の大都市とは比べられないほどの静かで美しい自然環境があり、勉強しとていいところだと感じられました。綺麗で、人が親切で、天気が悪い町だと思います。

自然がきれいで空気も良いし夜空が特にきれい。緑が多くてド田舎だという風に思いました。

きれいだなと思った。静かで住みやすいところだと思いました。マイカーがない私には、交通が不便でした。いなかだな、さびしそうだ。人は少ない、環境は綺麗。きれい。きれいな県です。

鳥取はきれいな町で、鳥大も立派でいい学校です、先生方も親切でいろいろお世話をしてくれた。

It had positive impression. Good view. I feel good because I like countryside. Quiet, clean, small. It was a quiet and beautiful city, but the first life made me feel a little depressed.

#### (4) 回答時点での地域の人々への印象

秋田回答者の、秋田の人々の印象に関するテキスト分析では、「親切・優しい」（有効回答23件中39%）「友好的」「良い（人）」（各26%）「丁寧」（9%）など好意的な言葉が多いが、「シャイ」「外国人をじっと見て無礼」「外国人に対して閉鎖的」と回答した者もいる。秋田では外国人口比率が低く、秋田市以外へも留学生を交流に送り出しているため、外国人慣れしていない住民との接触も多いことが、これらの指摘の背景にあると推察される。鳥取の回答は下記の通りで、「親切」「優しい」という回答が多いが、「心では外国人を拒絶する」と回答した者もいる。

大分では、大分県人に対する印象を、①大嫌い、②あまり好きではない、③どちらとも言えない、④わりと好き、⑤とても好き、から選択し、選択理由を記述させる回答形式を採った。その結果、日本語回答では、「とても好き」「わりと好き」が各5名（各45.5%）、「どちらとも言えない」が1名（9.1%）であった。「どちらとも言えない」と答えた留学生は来日後、日が浅く、交流への参加経験も少なく、回答選択理由を記述していない。英語回答では「とても好き」7名（有効回答中87.5%）、「わりと好き」1名（12.5%）であり、理由は下記の通りである。親切を受けた経験が大きな影響を与えており、英語回答者では、地域住民が留学生の国や文化へ関心を示したこと、積極的に話しかける態度、ボランティアで日本語を教えてもらった経験などが好意を持つきっかけになっていることがわかる。大分県の留学生人口比率は秋田県の12倍に上り、APU 設立以来、留学生との接点も増加し、オープンで自然な形の交流が定着しつつあると推察される。

<鳥取の日本語及び英語記述回答>

すごくいい。親切です。親切。すごくいい、いつも優しい。やさしくて純粋。やさしい。とても、親切で呑気な方々だと思います。日本で一番良い人たちが集まっているところが鳥取だと思っています。

外国人との文化交流に積極的で、鳥取の方々と交流ができて楽しかったです。

普段はとても親切ですが、なんか心では外国人を拒絶するような感じがします。

感謝の気持ちです、私は卒業したあとで鳥取で就職したい、鳥取の人々に返還したい。

小さい街ですけど、人間情味が濃いと思っています。いつも笑顔で親切に話してくれます。

They are very kind and cooperative. They are very kind. They were very enthusiastic.

They were not only interested in cultural exchange but also loved learning.

<大分の日本語版及び英語版記述回答>

やさしい 暖かい 余裕がある。とてもやさしいです。私の人生にとって、すごく重要で、感謝する人が何人かいます。学校の日本人達は優しくとてもいい人だったから。前に住んでいた市役所の職員さんがとても優しくかったです。日本人でとくにだれかが嫌いって感じたことはない。

People in Oita are really jolly and wanted to talk to International students. They are very nice with international students and always show interest in knowing more about other countries' cultures.

They are very nice, friendly and kind. Even though they cannot speak English at all, but they always smile and try to understand and help us. I have only good experience with them. Oita prefecture people are more flexible and more open towards International students or foreigners. The people here are kind to Gaijin. I attended a volunteer Japanese class at Beppu Tourism Center and it's very helpful. Most of the people I have met in Oita were very nice people who were very interested in knowing more about what life outside Japan is and they are very supportive towards international students who are studying away from their hometowns.

#### (5) 留学して有利な点, 不利な点

留学して有利な点について、秋田の英語回答者のテキスト分析では、自然（20%）、環境（10%）、生活費（6%）、静か（6%）などの語彙が多く見られ、街から離れて静かなため勉強に集中できるという回答も複数見られた。大分でも、人が優しい、生活しやすい、豊かな自然などの回答が多く、英語回答者では、世界から集まった留学生と友達になれることを挙げる者も複数いた。鳥取でも、人々が親切で、生活費が安く、空気がよく、交流機会が多いことが挙げられている。

不利な点については、秋田の回答のテキスト分析では、「困難・遠い」（各19%）、「不便」（6%）などの語彙頻度が高く、市街から離れ、交通手段も限られ不便であり、アルバイト機会が少ない、気晴らしが少ない、交通費が高い、若者が少ないことなどが指摘されている。大分でも、交通の不便、遊ぶ場所が少ない、アルバイト時給が低い、交通費が高い、という回答が多い。鳥取でも交通の不便に関する回答が最も多く、遊ぶ場所が少ない、天気が悪い日が多い、が続く。

#### (6) 地域の人々へのメッセージと提案

地域の人々に対するメッセージでは、19名の秋田回答者の中18名が「秋田の人が好き」「感謝します」「頑張りましょう」など好意的な言葉を寄せているが、「すべての人と国に対してオープンに」（ドイツ人女子留学生）というコメントもあり、住民側が留学生に十分心を開いていないケースがあったと推察される。また「頑張りましょう」という言葉には、都会に比べ不利な条件下で頑張る秋田の人々へのエールが感じられる。より多くの留学生が秋田に来るための提案としては、秋田留学経験者による秋田やAIUの紹介、海外の大学との協定の拡充と学生交流の活発化、国際的学校の増加、文化体験の増加、「古い日本（文化）」と結びつけた秋田の広報、AIUのウェブサイトへのビデオや写真の掲載などが挙げられている。聞き取り調査では、フランス人交換留学生が「美しい自然」

「森」「親切な人々」を海外で広報する必要性を指摘し、「秋田いかたす」というウェブサイトで、秋田の魅力を中国語で発信するアルバイトをしている中国人留学生（正規課程）も、秋田とAIUを対外的に広報し、秋田の良さがわかるきっかけ作りが必要であると語っていた。

留学後に地域の人々との絆を維持・活用する方法（秋田と鳥取で質問、複数回答可）について、秋田では、インターネットを通じたコンタクト継続（72%）が最も多く、自国／大学での秋田の紹介（69%）、秋田の人に自国を訪問するよう勧める（63%）が続く。鳥取では、インターネットを通じたコンタクト継続（60%）、鳥取を再訪（53%）、自国／大学での鳥取の紹介（47%）、の順であった。

大分の回答でも、地域の人々へのメッセージとして、大分の人への感謝や好意が綴られているが、「みんな感動するものがいっぱいあるこの町を守りながら元気に作っていきましょう！」「一緒に頑張ってください」など、正規課程留学生の回答者が多いためか、地域の一員としての意識をより強く示す記述が多い。留学生にとって魅力的な地域にする提案としては、英語回答者から、郵便局、警察、銀行、駅、病院、図書館など公的機関への英語ができる職員の配置（2名）、公的手続き書類等の英文化のための学生ボランティアの組織化などが挙げられている。留学生増加のための方策としては、大学や地域からの経済的支援の増加（4名）、教育の質の向上、大分留学経験者による広報、海外との学生交流の強化、海外広報の拡充、新しい国際大学の開設などが書き込まれている。

鳥取でも、鳥取の人への自由メッセージの多くに謝意や好意が表され、「一緒に活発な鳥取を作しましょう」と、地域の一員としての意識を強く示す回答もあった。留学生にとって魅力的な地域にするための提案としては、来日時の自転車の供与、買い物場所へのバスの運行、留学生と日本人学生が共通の目標を持ち協力するイベントの開催が挙げられ、留学生増加のための方策としては、広報の必要性について6名から指摘があり、海外大学との協定の拡充を3名が提案している。

#### 4. 考察

大分、秋田、鳥取の留学生調査に基づく分析から、地域交流は、県の政策・施策に留学生交流が位置付けられ、体制が整備されている秋田や大分においてより活発であるが、相対的に低い鳥取の地域交流参加率も大都市圏よりは高いと推定され、3地域とも、工夫を凝らした様々な交流が実施されていることが判明した。オンライン調査は、留学生教育・支援機関／教員から呼び掛けたため、これら組織が企画する行事への関心が高い留学生が回答したというバイアスを考慮する必要があるが、留学への満足が大きい者だけではなく、不満が大きい者も熱心に回答すると考えられることから、調査結果は、3地域の留学生の実態や意識を、ある程度反映していると考えられる。

留学理由として、交換留学生は「協定校だから」という理由が最も多く、それ以外の留学生では「留学・生活費の安さ」を挙げる者が多く、美しい自然、質の高い教育、指導教員／先輩／友人の勧めも、留学を促す要因となっている。

地方留学の利点としては、豊かな自然、静かな環境、生活費の安さ、人の親切さなどが挙げられ、不利な点としては、交通の不便さ、気晴らしの場所の少なさ、アルバイト機会の少なさなどが指摘された。留学生の地域の人々への印象は、親切・優しい、友好的など好意的な回答の多さが共通し



ており、地域の人々へのメッセージでも、一部に閉鎖性を指摘する声があるものの、感謝や好意の言葉が大多数である。大分と鳥取では「一緒に（いい）地域を作りましょう」といった地域との一体感を示す回答もあり、交流体験が、地域の人々への好意や共感につながっていると考えられる。

大分と鳥取では観光振興への協力を行う留学生の割合が高く、外国人材を地域に取り込む目標を掲げている大分県では、企業との交流やインターンシップ、就職説明会への参加率も高く、地元で就職する留学生も増加している。大分県の調査では、85%の住民がAPUは別府の国際化に寄与したと回答しているが、その主要因は、留学生との交流機会の増加であると推定され、交流は、留学生と地域住民の双方に、概ね満足とメリットをもたらしていると推定される。

留学生増加方策については、元留学生の協力を得た広報や、海外交流協定の拡大を提案する声が多い。このことから、地方へ留学生を増やすためには、留学・生活費の安さ、美しい自然、人の親切さなどの留学利点を、元留学生の協力を得つつ積極的に海外広報すること、海外協定校の増加が必要であると考えられる。その地方ならではの特色ある教育や体験を提供することも有効であろう。3県の内、国立大学を中心とした取組みを行う鳥取県では留学生が減少しており、地方に留学生を獲得するためには、大学や自治体が従来以上に努力する必要性を示唆している。

大分では、留学生増加のためには、大学や地域からの経済的支援の増加が必要とする意見が複数寄せられた。APUは運営費の2割を留学生の学費免除に充て、大分県も月2万1千円の奨学金を120人の留学生に支給している。しかし、大都市圏に比べアルバイトの職種が限られ、時給も低い中、私費留学生が持続的に大分に留学するためには、経済的支援の拡充が必要であることがわかる。

APU関係者によると、英語による国際的教育プログラムを拡充している他のアジア諸国の大学の台頭で、留学生の獲得環境は厳しさを増しているという。また、AIUは秋田県から多額の財政支援を受けてきたが、知事交代後、財政支援の削減が始まり、経済的自立が模索され始めている。

留学生は、過疎化高齢化が進み、外国人口比率が低いこれらの県において、地域や教育の国際化に重要な役割を果たし、観光振興にも一定の効果を挙げていると考えられる。留学生も、地方留学を概ね前向きに捉え、地域の人々に好意を持つ傾向が見られる。しかし、国際的な留学生獲得競争の激化の中で、これら地方の大学が継続して留学生を獲得することは容易ではない。地方自治体の政策や支援が、地方留学の促進や交流促進に果たす役割は大きいですが、財政的には限界がある。

グローバル30や大学の世界展開力強化事業など高等教育の国際化支援にかかる競争的資金は、大都市圏の大学が獲得するケースが多いが、地方において留学生が果たす役割の大きさと留学生獲得のハンディに鑑みて、留学生の受入れ増加や地域交流、国際的教育の実現に取組む地方大学の努力を正当に評価し、支援に結びつける政策的な仕組み作りが、今後重要になると思われる。また、大学が、地方自治体、地元企業、コミュニティ等と連携して留学生を支援し、交流を促進する先進的取組みに対して、2012年度から文部科学省が「留学生交流拠点整備事業」として支援を開始したが、「留学生受入れの経済的持続性」を高める仕組み作りについても、今後、目を向ける必要があるのではないかとと思われる。

\*本調査は、トヨタ財団の研究助成（D10-R-0470）を受けて実施した。

## 【引用文献】

- 大分県・別府市（2010）『大学誘致に伴う波及効果の検証—立命館アジア太平洋大学（APU）開学10周年を迎えて』大分県・別府市。
- 大分県（2011）「大分県海外戦略」（<http://www.pref.oita.jp/soshiki/10140/senryaku.html>）＜2012年9月19日アクセス＞。
- 国際教養大学（2012）「数字で見る国際教養大学：出身大学所在地別留学生数（2010年秋学期）」（<http://www.aiu.ac.jp/japanese/university/university02.html>）＜2012年9月19日アクセス＞。
- 佐藤由利子・橋本博子（2011）「留学生受入れによる地域活性化—自治体と大学の協働による取組みの横断的分析—」『比較教育学研究』第43号，131-153頁。
- 佐藤由利子（2012）「留学生受入れによる地域活性化の取組みと課題」ウェブマガジン「留学交流」，2012年6月号（<http://www.jasso.go.jp/about/webmagazine201206.html>）
- 白土悟他（2010）『国際拠点都市形成のための地方自治体と大学のパートナーシップに関する研究—福岡における国際拠点都市形成に関する研究—留学生を中心とした海外高度人材の集積—（2007年度トヨタ財団研究助成）』1-264頁。
- 総務省統計局（2010）「社会生活統計指標—都道府県の指標：人口統計・経済基盤基礎データ」（<http://www.stat.go.jp/data/ssds/5.htm>）＜2012年9月19日アクセス＞。
- 竹田洋志（2012）「鳥取県における留学生が地域に果たす役割」留学生教育学会第17回研究大会発表資料。
- 鳥取県（2008）「鳥取県の将来ビジョン」（<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=96137>）＜2012年9月19日アクセス＞。
- 日本学生支援機構（2011）「平成22年度外国人留学生在籍状況調査結果」（[http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/data10.html](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data10.html)）＜2012年9月19日アクセス＞。
- 秦敬治（2001）「大学とコミュニティ（地域社会）の共生についての先行研究の再考察」『教育経営学研究紀要』第5号，117頁。
- 法務省（2010）「都道府県別 登録外国人統計表 在留資格（在留目的）別 外国人登録者」（[http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html)）＜2012年9月19日アクセス＞。
- 法務省（2011）「平成22年における留学生等の日本企業等への就職状況について」（<http://www.moj.go.jp/content/000077277.pdf>）＜2012年9月19日アクセス＞。
- Rofe, M. & Macintyre, C., (2007). Educational Markets as Urban Development Generators: Intersection of Governance, International Students and Local Communities in Adelaide, South Australia. *Refereed proceedings of the 3<sup>rd</sup> State of Australian Cities Conference*, 397-406.



## **The Costs and Benefits of Studying in Rural Cities in Japan: Results of a Survey of International Students in Oita, Akita and Tottori**

Yuriko SATO\*

In this article, the exchange between the local residents and international students and the latter's perception of the region and local people were analyzed based on an online survey of international students in Oita, Akita and Tottori prefectures where the population is decreasing and the ratio of residents above 65 years old is more than 26%. In Oita and Akita, the prefectural governments supported the establishment of the international universities and the number of international students has increased sharply. In Tottori, a national university has adopted an internationalization strategy and accepts about 90% of the international students in the prefecture. The number of international students in Tottori has, however, declined 7% in the past six years. The results of the survey show that the percentage of the international students who participate in the exchange with pupils/students in local schools and home stay/visit activities is higher in Oita and Akita than in Tottori, partly because the prefectural governments have promoted the exchange between the local residents and the international students. Still the percentage of the international students who participate in these exchange activities in Tottori is higher than that of the universities in the metropolitan areas.

Most of the international students who study in these prefectures have affinity and gratitude towards the local residents partly because of the frequency of and satisfaction with the exchange with the local people. Though many of them find the local life rather inconvenient and dull, they also find merits in studying in these prefectures, such as inexpensive living cost, natural- beauty, kind people and a quiet environment.

Considering the important role of international students in the internationalization of education and rural regions, and the disadvantage of the rural universities in attracting international students, it will be necessary to consider a system to evaluate and support the efforts of rural universities in promoting the acceptance of international students and the exchange between them and rural communities.

---

\* Associate Professor, International Student Center, Tokyo Institute of Technology